

水稲新奨励品種「秋田糯43号」の特性と栽培法

田口光雄*・鎌田易尾・山本寅雄・畠山俊彦・真崎聡・加藤武光・島田孝之助**

(*角館農業改良普及所・秋田県農業試験場・**遺伝資源開発利用センター)

Characteristics of a New Rice Cultivar "AKITA MOCHI 43"

Mitsuo TAGUCHI*, Yasuo KAMADA, Torao YAMAMOTO, Toshihiko HATAKEYAMA,

Satoshi MASAKI, Takemitsu KATO and Kounosuke SHIMADA**

(*Kakunodate Agricultural Extension Service Station, Akita Agricultural Experiment Station, **Akita Research Institute For Genetic Resources)

1 はじめに

近年、消費者の良食味、グルメ指向が高まる中で、米加工品についても、より加工目的に適した良質米が求められている。秋田県の水稲もちについては、オトメモチ、ヒデコモチを奨励品種として栽培促進を図ってきた。しかし、近年食品加工を中心とする実需者から、さらに粘りや、味等の質の向上要請が強まり、こうした嗜好に適する品種の育成に努めてきたところ、これまでの2品種を上回る良質品種が育成された。

「秋田糯43号」はヒデコモチの耐冷性を改善し、安定多収で、餅質良好の中生の晩の糯米品種として1992年から秋田県の奨励品種として採用されたので、その特性と栽培法について概要を報告する。

2 育成経過

「秋田糯43号」は秋田県農業試験場において1981年に「中部糯37号」を母とし、「アキヒカリ」を父として人工交配した材料に由来する。1982年からF₁、F₂を温室栽培して世代促進を行った。1983年F₃集団を圃場栽培して個体選抜を行い、さらに1984年からは系統選抜を行い、1987年F₇で「秋系糯205」の系統番号をつけた。1988年F₈で「秋田糯43号」の系統名をつけ奨励品種決定調査に供試し、検討を重ねてきた。1991年3月種苗法に基づく品種登録を申請した。

表1 「秋田糯43号」の特性

品 種 系統名	熟 期	草 型	芒		稈 色	葉 色 (もち 耐病性)	耐 倒 伏性	耐 冷 性	穂 発 芽性	品 質	食 味	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/㎡)	倒伏 (0~5)	収量 (kg/a)	千粒重 (g)	品質 (1~9)
			多	少																
秋田糯43号	中生の晩	中間型	中	やや短	褐	中	中	強	中	上下	上上	8.10	9.22	68.8	16.8	444	0.1	61.1	21.5	4.2
ヒデコモチ	中生	偏穂重型	無		黄白	(極強)	やや強	極弱	中	上下	上	8.6	9.16	69.2	18.0	420	0.6	57.3	20.4	4.6

注. 本場の奨励品種決定調査、標肥区の成績 (1987~90)

表2 餅加工特性 (1989)

品 種 系統名	餅つき 時 間	外 観 (はだ)	光 沢	粘 り	硬 さ	弾力性	総合判定
秋田糯43号	普 通	やや悪い	やや悪い	粘 る	硬 い	あ る	良 い
ヒデコモチ	普 通	やや良い	やや良い	やや粘らない	やや軟い	ややない	やや悪い
オトメモチ	普 通	やや良い	やや良い	普 通	普 通	普 通	普 通

3 特性の概要

「秋田糯43号」の稈長はほぼヒデコモチ並のやや短稈で、穂長はヒデコモチよりやや短め、粒着密度は中程度である。穂数はヒデコモチより多く、草型は中間型である。倒伏抵抗性はヒデコモチより強い。稈先色は鮮明な褐色で、芒はオトメモチよりも多く長い。

「秋田糯43号」の出穂期、成熟期はヒデコモチより遅い中生の晩で、出穂期は3~4日程度遅くなっている。いもち病抵抗性はPi-a遺伝子を持つと推定され、圃場抵抗性は中程度とみられる。白葉枯病抵抗性は中程度と強くなっている。耐冷性は、生育期間を通じて低温に弱いヒデコモチより明らかに強い中程度まで改善されている。穂発芽もヒデコモチより改善されている。収量性はヒデコモチに勝り安定して多収である。粒形は同程度であるが長径がやや長く、千粒重は重くなっている。品質はヒデコモチ並の上下である(表1)。

「秋田糯43号」の特徴の一つとして、餅質が極めて良いことがあげられる。餅加工業者に依頼し、従来の奨励品種ヒデコモチ、オトメモチを対象にして、餅をつき餅加工適性試験を行った。外観はヒデコモチ、オトメモチのほうが良かったが、「秋田糯43号」はこしが強く硬いので形が崩れにくく、歯ごたえが良く、近年になく餅質が良いという評価であった(表2)。食味官能試験では符号検定による有意差はなかったが、ヒデコモチより良いという傾向がみ

表3 糯米食味官能試験 (1991)

評価	総合	外観	味	こし の強 さ	硬さ
良い	6	11	3	11	5
悪い	2	3	3	2	6
同じ	13	7	15	8	10
有意差	ns	ns	ns	ns	ns

* 標準品種はヒデコモチ。

表4 成熟期調査 (1991)

項目 施肥	出穂期 (月日)	倒伏 (0~5)	下葉枯 (0~5)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/m ²)	有効 茎歩 合 (%)
5222	8.2	0.5	4.0	67.3	17.2	456	62.0
7220	8.5	0.5	4.0	67.3	17.1	453	60.0
7202	8.5	0.5	4.0	67.9	16.9	416	56.1
7022	8.4	0.7	3.0	67.2	17.5	444	60.5
7222	8.4	0.6	3.0	68.1	17.2	473	59.6
9222	8.4	0.7	4.0	69.5	17.5	470	58.8

* 施肥法: 基肥+活着期+幼穂形成期+減数分裂期

られた(表3)。2つの試験結果から、「秋田糯43号」は粘りや弾力性が良く、餅質が極めて良いことが認められる。

「秋田糯43号」の施肥反応試験の結果を表4、5に示した。多窒素基肥にすると稈長は長くなり、穂長の変化はほとんどないが、穂数は多くなる。しかし有効茎歩合は低下した。多肥によって倒伏は大きくなるがその程度は小さい。

表5 収量調査 (1991)

項目 施肥	全重 (kg/a)	精粳重 (kg/a)	玄米重 (kg/a)	同左 比率	千粒重 (g)	品質 (1~9)
5222	150.1	68.3	55.1	102	20.9	3.5
7220	161.7	65.0	52.5	97	20.8	4.0
7202	157.8	67.1	54.2	(100)	21.2	4.0
7022	152.7	68.2	55.1	102	20.9	2.5
7222	146.4	62.8	55.5	102	21.0	3.5
9222	152.6	73.1	59.4	110	20.7	3.5

* 施肥法: 基肥+活着期+幼穂形成期+減数分裂期

玄米重は多窒素基肥で増加する傾向にある。追肥時期別にみると幼穂形成期追肥は穂数、1穂粒数を多くし、減数分裂期追肥は登熟歩合を向上させる傾向がある。

4 ま と め

以上の結果から、「秋田糯43号」は耐冷性及びいもち病抵抗性が中の中生の晩の良質多収糯米品種であり、餅質は極めて良好で、ヒデコモチの代替品種として県北部を除く県内平坦部に普及できる。

「秋田糯43号」の栽培に当たっては以下のことに注意が必要である。①葉色が淡く、本田中期から下葉の枯れあがりが目立つが、過剰な追肥は謹む。②穂孕期の追肥は減数分裂期を中心とし、登熟・品質の向上を図る。また、③遅刈りは茶米の発生を増加させ、品質を低下させるので適期刈り取りに努める。